

ホセ・マリア・アルバレス  
清水憲男 訳

『スペイン現代詩』所収  
(二〇〇五年、上智大学イスパニア研究センター 刊)

「詩論」

拝啓

詩論を私にお求めでいらっしやいます。

今想い出しますのは、ジョニー・ホッジスが演奏していたあの晩のことです。一人の野次馬が演奏のコツを尋ねました。するとジョニーはその男を見つめてから、サックスを手にして『ジャスト・ア・メモリー』の出だしを吹いて言ったものです。『こうして吹くのさ』。

よろしいでしょうか。私はエミリアーノ・サパタと歩みを共にしたあの連中同様の書き方をするので。

何と申し上げたらよいのでしょうか。とにかくにも、書くと言うことは、私には一種のゲームのように思えるのです。ゲームと言ってもロシアン・ルールツトのことですが、もちろん。

それにこれは、私が本当に心酔するのはビリヤードの遊戯者とピアニストであることを考慮に入れた上で申し上げていることなのです。

自分の生業（なりわい）への思いをたった一文に凝縮しなくてはならないとするなら、▶・ブルトン師の彼（か）の一文をもって申し上げることになるうかと思う次第です。「ここで、そしてそこかしこで、使い古しという狂った獣を追い込まねばならない」。

敬具

「時のはかなさについて」

天の向こうで起こっていることを探究する狂気、黄金時代の人間の頭をかすめることさえなかったこと  
エラスムス

おお — 憔悴しきって叫んだ — 憩い、静寂、  
それとうまい煙草が欲しいだけだ！  
E・デ・ケイロス

パトリシアとマリオ・バルガス・ジョサに

澄んだ夜、自分の杯を満たすとき  
おお、想い出の憂鬱に  
己を投げ出すことなかれ。  
過ぎ去った時を押しとどめることもならぬ、無駄なことだ。  
己の記憶を売女の口に引き渡せ。  
飲びと共に飲むがいい、そして何も期待しないこと。  
命は、その杯の時間に如くものでしかないのだ。

### 「ザ・シャドウ・ライン」

私には高い帆など見えません、船長。  
ジョセフ・コンラッド  
ジョセフ・コンラッドを回想して

九月の風が海辺で  
不可思議な道を何本も開いてゆく。  
砂地まで波によって運ばれ  
やがて波に消し去られてゆく残骸を  
もの静かな海鳥たちが見守る。  
船舶の残骸、いるかの孤独、  
人々の夢。  
これ芸術一如。  
また愛の燃え滓も同じ。

### 「ロッキング・チェア」

生き延びて、会話を交わし、扇をあおぐ  
相手の踊り子たちの甘美な感動に  
ひたすらに想いをいたす紳士たち  
ビセンテ・アレキサンドレ  
とかげ狩り 「世界は論戦だ！」

ラテン殿 「歪みだ！」  
酔っぱらい 「卓越した頭蓋だ！」  
ラモン・デル・バジェーインクラン

三年にわたり本書を  
書き写してくれた  
ロサ・アラランダに

愛の行為を果たしたら、幸せのうちに  
女の裸体を

見つめる。女をいとおしみながら覆ってやる。

冷たい唇に口づけをする。

― 運び出していただいて結構です。首吊り

自殺です」。

― 「分かりました、先生」。

### 「鏡を前にした貴婦人」

元気な男を投げ出し、冷たくなった夜明けを迎える  
ペドロ・ロペス・デ・アヤーラ

英雄的な灰  
ニカンドロ

名声を前に鏡が無防備

想い出されると言うことは

とほうもなく

おごそかなこと  
なのだ。

### 「凸面鏡からの自画像」

これからジョンソンの一生で起きたもつとも数奇な某出来事について

少々詳しく語ることとしよう。

ジョイムズ・ボスウエル

シオンの壁を打ち破ること  
これが栄光のうちに闘う標的だった  
トルクアト・タツソ―

こんな詰まらぬことは記録から排除されるのがお決まり。

その詰まらぬことどもが過去の特性なのだ。  
サン・シモン

「幸せな少数者へ」

夜更けが消し去る  
私の足跡

酩酊のさなかにあつて私は  
永遠なるもの。

### 「酩酊賛歌」

私に幸せなんて無用の長物。それ以上に人生は崇高なのだ。  
ジョージ・バーナード・ショー

運命がカードを切る。けれどもゲームをするのは私たちだ。  
マシュー・ペンハウエル

己の顔を鏡の中で凝視するがいい。  
ブリアス・デ・プリエヌ

ついてないと愚痴るだけの資格が自分にはあるのか？

この地表は自分の夢よりも高次の別の夢を

もっと崇高な追われ者たちの涙を  
すすったのではなかったか？ こうした砂は

なのに、自分たちは彼らの名前さえ想い出さない。

我らも忘れ去られ

幾千回となく 我らの詩文の意味も

変えられてゆくことになろう。

我らが言ったあのことが

ついに認められるようになるのは

どこ いつ そして何語によるのか・・・

変遷のさ中で澄みきったまま

うつろわぬ言葉など、ついぞかなわぬ話か。

舟乗りたちが聞かせる物語の

みずみずしさに いつの日か あやかれる

人生や作品など、しよせんかなわぬ話か。

書くがいい、そして飲め。明るい夜のもと

星々のために祝杯をあげよ、飲め

己よりも先に、この  
苦渋の道を辿った者たちの  
高貴なる想い出のために。彼らのために杯を傾けよ  
彼らが破滅から救い出してくれた世界のために。  
夢と失望とが溶け合う  
夜更けを 葡萄酒の中に見つめるがいい。  
自分の言葉の代価として  
己の宿命を受け入れよ。書くがいい。

「さもなくば我が祖国（マリア・カラス）」

現実には舞台だった。私、観客、聴衆そして当のスカラ座までもが作り事。

舞台上で起こっていることだけが命だった。

カルロ・マリア・ジウリーニ

君は月のように  
世界の廃墟を照らす。  
ある晩、「ルチーア」で君を聞きながら  
俺は理解した。  
芸術とは 特定の存在が  
神秘のうちに放射する  
神秘的なもの。またそれに劣らず神秘的な  
他の被造物が  
享受するもの。

自分たちの時がもう終わろうとする時  
大いなる鳥の 君は  
そのたそがれに通るかかって  
永遠に輝くのだ  
パルテノンの清廉な美しさが  
空に抗して屹立するように、  
オセロの不眠のように、  
さもなくばレンブラントがまぶした黄金のように。

「荒涼たる偉大」

トロヤの壮大な塔の群れは塵芥と化す  
アレキサンダー・ポープ

我らエリの王国に行かん。そこには

もはや語るに足るものが皆無ゆえに  
マルコ・ポーロ

最良のものを信ぜよ、祝福の小径を歩め  
フリードリヒ・ヘルダーリン

これで旅は終わり。  
私はホテルの窓越しに  
凍てついた夜

おしとどまる黄金の塵さながら  
ローマが広がるのを眺める

これがすべてだったのだ。

これが。そしてパレルモの

図書館の澄んだ記憶

ロンドンでの数日、

モーツアルト、ショパン、スタンダール、こよなく愛した誰かの顔

名誉を守り抜いた我が人生の贅

そして自分の本。世界をひととき美しく

ひとときわ高貴にしたページの連なり

## 「殺伐たるものへの嫌悪を越えて」

私はこれを伝説の地でみつけた  
ウラジミール・ナボコフ

茶の湯の偉大な師

小堀遠州に想いを

馳せながら岡倉が語るに

時は宋の時代

一貴族が言ったという。

年端のいかぬころには

自分を魅了する画布を

描いた絵師への賛辞を

私は並べたてていた

がしかし、時と共に成長すると

私が讚えるのは自分自身となった。

私を喜ばせるための作品をものした

偉大な芸術家の作品を

享受できる器（うつわ）に自分がなり

それに感動している己を発見すること。  
このことについて沈思なさるがよからう、  
親愛なる読者よ。

### XIII

海が海の男たちを老けさせるのと同じで  
愛がお前を老けさせてゆく。

#### 竜安寺（京都）

驚きを込めてお前に告白してやろう。  
ジョン・ミルトン

フランシス・スコット・フィッツジェラルド

岩  
が十五 それなりに  
配され もしや  
我々が  
知りうること  
すべて